

雄阿寒岳（1370m）

コース概況

阿寒湖の東岸にそびえる雄阿寒岳は、阿寒カルデラの東縁を構成する火山であり、道東を代表する山の一つである。標高は 1370.2m と北海道の山としてはそれほど高くないものの、湖畔からほぼ一気に山頂へと登る地形のため、登山口からの標高差は約 1000m に達する。整った円錐形の山容は阿寒湖畔からよく目立ち、対岸の雌阿寒岳とともに阿寒の景観を象徴する存在となっている。

登山道は湖東端の滝口から山頂へ延びる一本のみで、往復の標準的な行動時間は 6～7 時間ほどである。道標も整備されており道迷いの心配は少ないが、長い登りが続くため体力を要する山である。登山道の植生は、エゾマツやアカエゾマツ、トドマツなどの針葉樹にミズナラなどが混じる樹林帯から、ダケカンバ帯、ハイマツ帯、そして火山礫の山頂部へと、段階的に変化していくのが特徴である。

6 月下旬の雄阿寒岳は、長い冬を終えたばかりの初夏の山の姿を見せる時期である。例年この頃には登山道の残雪はほぼ消え、夏山登山の条件が整い始める。ただし年によっては山頂付近や風の当たりにくい窪地に雪渓が残ることもあり、早朝には雪面が凍結して滑りやすい場合がある。また、阿寒地域は霧が発生しやすく、視界が急に悪化することもあるため、天候の変化には注意が必要である。

今大会のスタート地点は標高 390m の滝見橋駐車帯であり、標高 420m の滝口登山口まで国道 240 号線沿いを約 650m 歩く。滝口の水門を抜け、針葉樹林の中を阿寒湖畔に沿って登山道を進み、取水堰を通過すると、右手に太郎湖が現れる。太郎湖は阿寒湖から流れ込む水によって形成された小さな湖で、風のない日には水面に周囲の森が静かに映り込む。さらに進むと左手に次郎湖が現れ、森に囲まれた落ち着いた雰囲気、霧が登山序盤の景観のアクセントとなる。

ここで一度急勾配の坂を登ると、2 合目までは緩やかな道が続く。2 合目から 4 合目（約 950m）までは、急登となだらかな道が交互に現れるため、ペース配分を意識した歩行が求められる。また、倒木により通過しにくい場所や、湿って滑りやすい土壌、露出した木の根なども多く、注意が必要である。

4 合目までの樹林帯の林床では、白い花を咲かせるゴゼンタチバナ、小さな花を連ねるマイヅルソウ、ピンク色のエゾオオサクラソウ、**白色**のツバメオモトなどが足元を彩る。雪解け後に一斉に芽吹く植物の生命力を感じられる場所である。この樹林帯は道東らしい静けさに包まれており、初夏には濃い新緑と鳥のさえずりを楽しみながら登ることができる。エゾシカの足跡や落角が見られることも多く、自然の豊かさを実感できる一方、ヒグマの生息地でもあるため、熊鈴や熊スプレーの携行など十分な対策が必要である。

4 合目を過ぎると、植生は針葉樹からダケカンバへと変化し、傾斜も徐々にきつくなる。さらに 5 合目直下の尾根筋ではハイマツ帯に入り、急登が連続する。この区間が登山全体で最も厳しいポイントである。砂礫や滑りやすい土が露出しているため足場が不安定で、慎重な歩行が求められる。5 合目に到着すると視界が開け、阿寒湖や雌阿寒岳、阿寒富士などの雄大な景観を望むことができる。

5合目から6合目までは比較的穏やかな道が続くが、6合目以降は再び傾斜が増し、ダケカンバ林の中をジグザグに登る。この区間を抜けるとハイマツ帯が広がり、遠くには8合目の小ピークが見えてくる。そこには旧日本軍の気象観測所跡があり、現在は基礎の痕跡のみが残っている。8合目直前は火山礫の多い急斜面であり、歩幅を小さくして慎重に登るのが望ましい。

6月下旬のハイマツ帯では、高山植物が咲き始める。ガンコウラン、コケモモ、ツガザクラ類、ミネズオウなどが地面近くに広がり、イソツツジやエゾツツジが彩りを添える。天候が良ければ、登ってきた方向に広がる阿寒湖の景観とともに、標高差を実感できる眺望が楽しめる。

観測所跡以降は火口縁に沿った緩やかな道が続くが、その後9合目に向けて急坂を一気に下り、さらに向かいの斜面を登り返すと山頂に到達する。山頂付近は森林がなく、火山地形特有の荒々しい景観が広がる。風が強いことが多く、防寒対策が不可欠である。また、6月下旬でも残雪が残る場合があるため注意が必要である。

山頂からは阿寒湖やペンケトー、パンケトーといったカルデラ内の湖沼群を見下ろすことができる。さらに東には屈斜路湖や摩周外輪山、斜里岳、そして天候が良ければ知床連山や大雪山系、日高山脈まで見渡すことができる。この雄大な展望は雄阿寒岳登山の最大の魅力である。

6月下旬の雄阿寒岳は、新緑の森から高山帯、火山地形へと変化する景観を楽しむ時期である。残雪も少なく登山条件は安定するが、標高差が大きく急登も多いため、十分な体力と余裕ある計画が必要である。静かな森と湖、そして山頂からの大展望を堪能できる、阿寒地域を代表する登山の一つである。